

男女共同参画・働き方改革委員会企画 JOYFUL通信

防衛医科大学校病院整形外科

田口 瑛子

◆◆◆ 南極地域観測協力に参加して ◆◆◆

【はじめに】

私は平成20年に防衛医科大学校を卒業し、現在は母校の大学院に所属し3年目となります。整形外科医として約10年勤務している一方で、卒後は海上自衛隊に所属し、卒後2回約5カ月ずつ艦船に臨時勤務しました。1度目は卒後4年目の時に遠洋航海として練習艦「あさぎり」に乗艦し北米・南米を航行、2度目は卒後8年目の時に砕氷艦「しらせ」に乗艦し南極に行きました。

南極に初めて行った整形外科の女性医師として、珍しい体験ができたので今回執筆させていただこうと思います。

【第57次南極地域観測協力】

私は平成27年11月16日に横須賀から出国し、平成28年4月14日に晴海に帰国する第57次南極地域観測協力に参加しました。

私たち自衛隊の南極地域観測協力の任務は、観測隊をフォローすることです。観測隊を昭和基地へ送ったり、使用する物資の輸送をすることをはじめ、野外観測、海洋観測、基地設営などの支援を行います。

しらせに乗艦するのは自衛官約190名と観測隊約70名で、観測隊のうち約30名は越

冬します。医官は自衛官の中で1人しかいませんが、観測隊には1-2名の医師がいるため困った時は相談しておりました。自衛官は基本的には健康なため医官の任務は忙しくはありません。有事のために乗艦しているようなものです。

しかし、有事はやってくるもので、第57次では自衛官の急患が発生し、患者搬送のために予定外の南アフリカのケープタウンに南極から1週間かけて向かうことになりました。私は艦を離れられないため、日本からケープタウンに別の医官に来てもらい患者をボートで引き渡し、事なきを得ました。しかし、治療薬が限られていることに加え、艦長や隊員をはじめ様々な方の協力が不可欠であり、艦での医療の困難さを痛感しました。

このようなアクシデントに見舞われることもありましたが、沈まぬ太陽、鯨やシャチ、ペンギンとの遭遇、オーロラなど南極の自然は素晴らしく綺麗で感動的でした。

【南極地域観測協力と女性】

第57次は初めて女性自衛官が南極観測船に乗り込んだ年であり、私を含め10名の女

性自衛官が乗艦しました。乗艦中は年越しやバレンタインなど隊員のモチベーションを保つための様々なイベントがあるのですが、女性がいることで雰囲気是和やかになる場面も多くありました。最近では潜水艦への乗艦も解禁されたようですし、各方面へ女性自衛官が進出しております。筋力や体力など男性自衛官と差がある場面もあると思いますが、女性ならではの能力を発揮し活躍して欲しいと思いますし、先輩女性医官として彼女たちをサポートしていきたいと思います。

【今後について】

今回の南極派遣では医官は1人しかおらず、出発前は不安も多かったのですが、無事に帰ってきた今では貴重な体験をさせていただいたと感謝しております。整形外科医としてはまだまだ未熟ですが、この体験を糧にしながら今後も医師としての研鑽を積んでいきたいと思っています。